

## 第1回 原始～古代へ

### 1. 更新世

地質年代では原生代→始生代→古生代→中生代→新生代の5期に区分され、250万年前からの新生代を第3期と第4期に分ける。このうち第4期をさらに、**更新世**と**完新世**に区分する。更新世は、約10回の氷期が訪れる。氷期は今より温度が7～8度低かった。この時代、つまり第4期に人類が誕生している。地形的には海進（海面の上昇）と海退（海面の低下）がくり返されて、現在の海面より約100m低い。この時期、日本列島は大陸と陸続きであり、現在のような存在ではない。大陸と陸続きであることを証明するものとしてシベリア原産のマンモスの化石が北海道に、朝鮮半島からナウマン象・オオツノジカ（大角鹿）が日本列島各地に渡来したことがわかっている。特に長野県野尻湖では、ナウマン象の肋骨やオオツノジカの角などの化石が発見されている。

◆マンモスは本州には来ていない、逆にオオツノジカ・ナウマン象は本州から北海道に来ている。

### 2. 化石人骨

人類は、猿人→原人→旧人→新人へと進化する。日本における更新世期の人類の存在については、1931年直良信夫が明石の西八木海岸から腰骨を採集し、これを明石原人と考えたが、近年では縄文時代以降のものと考えられている。この他に、愛知県牛川人が旧人段階のものと考えられるほかは、静岡県の**浜北人**、沖縄県**港川人**は、新人段階と考えられている（※但し、浜北人については、「現在は縄文人と考えられている」という記述がある。→『新課程用 日本史B用語集』山川出版社、3p参照）。これら化石人骨は石灰岩層を中心に発見されている。というのも、雨が多い日本の土壌は酸性を帯びており、そのため骨の消失が早く、発掘例が極めて少ない。また、これらの人骨の特徴は、横幅の広い顔を持ち、身長も低く、中国南部の柳江人などと共通するもので、アジア大陸南部の古モンゴロイドだと考えられている。この古モンゴロイドに弥生時代以降に渡来した新モンゴロイドが混血し、現在の日本人が形成されたと考えられている。

◆旧石器時代の推定人口は、約8万4000人と考えられている。

### 3. 旧石器文化

1946年、群馬県岩宿の関東ローム層の中から相沢忠洋が打製石器を発見し、その後1949年、明治大学が調査した結果、日本にも旧石器時代が存在したことが確認された。関東ローム層は、更新世末期、富士山をはじめとした火山の活動が活発になった時期に関東地方

一体に堆積してできた赤土層で、上から順に立川ローム、武蔵野ローム、下末吉ロームというように堆積している。だから打製石器も楕円形石器は中間の武蔵野ロームから発掘されることが多く、その後のナイフ形石器や尖頭器は中間から上部の立川ロームで発掘され、細石器は立川ロームからさらに上の完新世の地層から発掘される。

今一度打製石器について記すと、打製石器は、楕円形石器→ナイフ形石器→尖頭器→細石器と発達する。尖頭器は槍先の機能を果たす道具で、同様のものでも、旧石器時代のものは尖頭器とよび、縄文時代のものは石槍とよび分けている、細石器はマイクロリスともよばれる。

旧石器時代の住居については具体的にわかっていないが、発掘例からすると、炉を中心に直径数mの範囲に石器くずや石くずが密集していることから、小さな屋根がけした住居だろうと考えられている、従来、洞窟や岩陰などが住居だと考えられてきたが、これらは狩猟用のキャンプとして利用されたものと考えられるようになった。また、生活集団は10人前後の小規模なものと考えられている。

#### 4. 縄文時代

完新世になると日本列島が誕生する。気候も温暖となり、これまでの動植物とは異なるものへと変化する。針葉樹林が退き、落葉広葉樹林が広がっていく。大形動物に変わって鹿・イノシシ・ウサギといった中小動物が出現する。

◆縄文時代の気候は、1万5000年前から温暖化し、湿潤化が進むのは1万3000年前からだと言われている。それはブナ属の花粉の増加で確認される。

#### 5. 縄文文化の特徴

この時代の文化の特徴は、①**新石器文化**の特質である**磨製石器**を持つこと。磨製石器には、石斧（木材の伐採用）、石匙（皮剥ぎ用）、石鏃などがある。②**土器（縄文土器）**の作成がある。土器の編年の相違により、草創期→早期→前期→中期→後期→晩期の6期に区分される。土器の形は円形丸底・方形平底など様々であるが、これは土器を作る際のモデルとなった皮袋・編籠などの形と関係するようである。土器作成の方法は、巻上げ法といって細長い粘土のひもをらせん状に積み上げ形を整えるものと、輪積法といって、粘土の輪を積み上げていくものに分かれる。一口に縄文土器と言ってもすべての土器に縄目模様がついているわけではなく、無文土器・爪形文土器・隆起線文土器などがある。また、縄文土器と弥生土器との制作上の違いはないと考えられており、両者の共通点として、①ロクロ（轆轤）を使用しないこと。②窯を使用しないこと。③1000度未満の酸化炎で焼くことが上げられる。

◆日本列島に均一的な文様の土器が出現しているわけではない。東日本の土器は複雑煩瑣であり、西日本では直接的で簡素という特徴を持つ。また、使用法としては、主に森のナッツ類（木の実）・山菜・動物・川魚を煮炊きするために用いられたと考えられている。

## 6. 縄文人の生活

この時代の人々は身長が低く平均 150cm 位と考えられている。平均寿命は 35～40 歳位であり、骨には時として木の年輪のような飢餓線が刻まれたものも見られる（それだけ、食料の確保が難しかったのである）。総人口は、東日本を中心に約 30 万人と考えられている。

彼らの住居は**竪穴住居**である。住居は**湧き水に近い台地上**に集落が立地している。竪穴住居も時期により形が異なる。方形から隅丸形へと変わり、後にカマド（竈）が内部に作られる。集落の周りには環状もしくは馬蹄形（U字型）に**貝塚**が設けられた。

遠隔地との交易は石器作成の必要から生じた。**黒曜石**は半径 200kmの範囲で分布し、長野県和田峠が著名な産地である。ひすい（硬玉）は半透明の緑色の石で勾玉の材料となり、富山・新潟県境の姫川が産地として知られる。

狩猟は主に弓矢により行われていた、漁労も発達し、丸木舟を使用し、骨角器の釣針、銚で魚を取った。石錘の発掘から網の使用も証明されている。福井県の鳥浜遺跡からは丸木舟が出土しており、この時代の漁業の存在を証明している。日常的には栗・シイ・ドングリなどの木の実の灰汁（あく＝苦いところ）を取って食べていた。

従来、日本では新石器時代に入っていながら農耕がない特殊な社会だと考えられてきた。しかし、近年の考古学研究の進歩により、前期以降には豆類・エゴマなどの栽培が始まっていたと考えられている。縄文晩期には水稲耕作も開始されていたとも考えられている。福岡県板付遺跡から水田跡が発掘され、佐賀県菜畑遺跡からも水田跡が発掘されている。大阪府の牟礼遺跡からも水田跡が見つかった。近年の考古学ではイネ科の植物に含まれるガラス質細胞（プラント・オパール）の測定により、より精密な研究が進んでいる。

縄文時代の社会は、死者の共同埋葬や副葬品のなさから、貧富・階級の無い社会だと考えられている。埋葬方法は一般的には**屈葬**である。これは死者の復活を防ぐために靈魂が抜け出さないような姿勢にしたのではないかと考えられている。また、成人儀礼の一つと考えられているものが抜歯である。上下の左右犬歯を抜くものである。歯を叉状に擦り切る叉状研歯も見られる。さらに**アニミズム**（精霊信仰）に基づく習俗としては、女性をかたどった土偶や石棒・土版などがある。

### ◆ 青森県三内丸山遺跡

縄文時代の代表的な遺跡。縄文前期～中期の 1500 年間に営まれた集落遺跡。東には成人の墓が列をなし、西には高床倉庫が並び、北には子どもの遺体や死産の子どもの土器に納め埋葬した墓地がある、

## 7. 弥生時代

中国では紀元前3世紀（BC3世紀）頃、秦が国家を統一した。この頃すでに中国では青銅器時代を経て鉄器時代に入っていた。日本も同じ頃に稲作・金属器・弥生土器を中心とした弥生文化が北九州に始まった。

## 8. 弥生時代の道具

銅と錫の合金である**青銅器**は、日本では祭祀に使用された。分布範囲も銅剣・銅戈は北九州、平形銅剣は瀬戸内海沿岸、銅鐸は畿内を中心とした地域に限られている。しかし、この分布範囲は一般的に言えることで、1984年**島根県荒神谷遺跡**からは、358本の平形銅剣と共に銅銚16本・銅鐸6個が出土されているし、福岡県岡本遺跡からは、1979年、銅鐸の鑄型が出土している、この銅鐸は朝鮮半島の鈴に起源をもつものと考えられている。

一方、**鉄器**は主に利器・工具・実用具として使用された。原料は、南朝鮮から輸入された板状・棒状の地金が加工されたと考えられている。この鉄器が使用されたことで次第に石器が駆逐されたと考えられている、その他、石包丁が稲の穂摘み用に使用された。

◆銅鐸は、初期は流水紋、後期には袈裟襷文けきたすきという文様を有している、また、島根県の加茂岩倉遺跡からは、1996年、銅鐸が大量に発掘されている。佐賀県安永田遺跡からは銅鐸の鑄型が発掘されている。

## 9. 水稻耕作

稲作伝来のルートはいくつかの説があり、確定されていない。米の起源はアッサム（インド）・雲南（中国）から中国南部にかけてと考えられている。いくつかある伝来ルートを考える上で米の種類がヒントとされる。つまり、米にはインディカ種（長粒種）とジャポニカ種（短粒種）があり、日本ではジャポニカ種しか発見されない。このことから長江下流域から朝鮮半島南部を経て北九州に伝わったという説が最も有力視されている。

稲作は、前期には低湿地を利用した湿田（排水施設が必要）が作られ、木製農具（木鋤・木鍬・田下駄）が使用された。すでに、田植えが始まっていたと考えられている。中期から後期には水はけの良い沖積平野に水田が開け、鉄製農具などが使用された。水田も灌漑排水のある乾田が作られた。

## 10. 稲作の国内伝播・弥生文化の伝播範囲

稲作は、弥生前期に北九州に始まり、約1世紀で西日本に広がり、中期には東日本、晩期には東北にまで及んだと言われる。しかし、近年の研究により、北九州に伝えられた稲

作は、日本海沿岸を北上し、弥生前期には青森県の砂沢遺跡、中期には同県の垂柳遺跡の水田跡に見られるような地域にまで伝播したとされる。

◆青森県砂沢・垂柳遺跡の発掘により、海路を使って早生の稲を持つ集団が移住したと想像されている、また、初期の栽培稲は水稲とも陸稲ともいえないもので、おそらく陸稲に近い種類だったと考えられている。

弥生文化は、従来の縄文文化とは異なり、薩南諸島から東北地方までしか広がらなかった。弥生時代、沖縄などの南西諸島では貝類などを食料とする南島文化（貝塚文化）が形成された。北海道も同じく鱒・鮭などを食料とする**続縄文文化**が7世紀まで続き、8世紀に**擦文文化**へと移行した。但し、続縄文文化は、縄文文化とは異なり、金属器を伴う文化である。つまり、弥生時代には、本州を中心とする弥生文化と沖縄を中心とする貝塚文化、北海道を中心とする続縄文文化が存在していたのである。

## 11. 弥生時代の生活

住む場所は低地に移っていく。紡錘車・機織などを利用して織物が作られた。社会の変化で最も大きなことは、小国が形成されたことである。このことは**高地性集落・環濠集落**などにより理解できる。高地性集落は、瀬戸内海から畿内にかけて標高200～300mの高地に作られた集落で、倭国大乱の際の見張場・避難所として使用されていたと考えられている。環濠集落は、九州から関東まで分布があり、数戸が集まり濠で囲まれているもので、1989年発掘された佐賀県**吉野ヶ里遺跡**が知られている。なお、一般にこの時代の集落は堅穴住居群がそれぞれ小グループを構成しており、次に倉庫と見られる総柱の掘立建物があるというまとまりであり、倉庫は集落内にまとまって建てられている場合と集落外に散在する場合とがある。

弥生前期には、集団墓地が形成されていた。また、北九州を中心に甕棺墓・箱式石棺・支石墓が作られている。さらに、周囲を1～2mの溝で囲み、盛り土をし、中央に墓穴がある方形周溝墓も作られた。埋葬方法も伸展葬に変わっていった。すでに弥生前期から青銅器を副葬する墓とそうでない墓とがある。また、墳丘墓などは集落ないしそれに近接した場所に作られている。

◆人間集団のあり方を検討するための素材は、集落跡と墓制である。

## 12. 小国の分立

まず、「小国」とは何か、ということから述べることにする。小国とは、**ムラの範囲を超えた首長を中心とする地域的な政治集団**のことである。小国の形成・分立については、中国史書によって知り得る。弥生中期に『漢書地理志』に記された百余国がそれである。『漢

書』は、後漢の班固が撰したものである。定期的に漢の植民地**楽浪郡**に朝貢していた。つまり、中国王朝への遣使は、紀元前1世紀（BC1世紀）から開始されていた。楽浪郡は、現在の平壤付近の場所で、楽浪以外には、**臨屯**・**真番**・**玄菟**があった。

次に『後漢書東夷傳』の記載である。これは宋の**范曄**が記したもので、日本（倭と呼ばれていた。倭が本当に当時の日本を指すか疑問視する場合もある）についての記述は3点ある。それは、①**建武中元2年＝AD57年**、倭の**奴国**（現在の福岡市付近とされる）が使者を送り、中国の光武帝から印綬（金印・紫綬）を受けている。この印綬の鈕（つまみ）は、蛇が彫られており、**凹文**である。この金印は、1784年福岡県志賀島で百姓甚兵衛が発見し、黒田藩が所蔵したもので、「**漢委奴国王**」（注意！「倭」ではなく「**委**」である）と刻まれている。②**永初元年＝AD107年**、倭国王**帥升**が生口（奴隷と考えられる）160人を献上したこと。③桓靈の間（147年～189年）、つまり2世紀後半に倭国大乱がおきていること。

### 13. 邪馬台国

謎の国「邪馬台国」について。現在でも発行されているのだろうか。『邪馬台国論争』なる研究書（？）や、『邪馬台国はなかった』（じゃあなんだ！）、『邪馬台国に雪は降らない』（雪が降ってはいけないのか！！）などといった雑誌や本。とどのつまりは、史料が限定されていて、邪馬台国があったという場所が畿内か九州かの違いである。

邪馬台国について記した史料は、『魏志』であり、そこでは、「**邪馬耆国**」と記されている（だから、「邪馬台国」はなかった！！のである）。『後漢書』や『隋書』では、「**邪馬台国**」と記されている。ところで、問題の『魏志』は三国志に1つ『魏書東夷倭人条』といい、通称を『**魏志倭人伝**』とよぶ。

邪馬台国があったと考えられる場所は、よく知られるように、**畿内説**と**九州説**とがあるが、現在でも確定していない。何故、位置が問題になるかと言えば、大和政権（大和王権という場合もある）の成立がいつかということに関係するからである。つまり、畿内説をとると3世紀には大和政権ができていたことになる。一方、九州説をとると、邪馬台国は北九州を基盤とする30余国の連合国家であるから、3世紀には大和政権はできていないことになる。これが後の歴史に影響を及ぼすとされる理由である。邪馬台国の位置は、大和政権成立に関する時期の問題である。ところが、場所問題だけが一人歩きし、関西圏の人は畿内説を、関東・九州圏の人は九州説をとる人が多い、ということもあって話を余計ややこしくするのである。

さて、『魏志倭人伝』の内容について。従来100余国に分立していたクニが30余国にまとめられたことが理解できる。女王**卑弥呼**は、弟の協力を得て祭政一致の呪術的政治を行っていた。**景初2年＝239年**に大夫（大臣のこと）の**難升米**を送り、「**親魏倭王**」の称号と金印などを与えられた。

邪馬台国では徴税が行われ、政治組織として一大率（地方検察官）が伊都国（現在の福岡県糸島郡と考えられる）に置かれ、大倭という市の監督がいたことがわかる。また、邪馬台国の階級構成は、王→大人→下戸→生口があった。卑弥呼の死後、男王が後を継いだ。国内は内乱となり、宗女（一族の娘）である**壺与**が王となり、内乱がおさまった。また、壺与は、266年、洛陽に使者を送ったことが『晋書』に記されている。